

2. 寄稿文の部



写真提供：茨城県

※所属・肩書き等は震災当時の内容を反映しています。

そのとき、東海高校は。

茨城県立東海高等学校 事務長 飯岡 孝行

その日私は、いつもと変わらず事務室で校務に従事していました。生徒たちは、校内行事で社会人講話と卒業生講話が行われており、発生時は、ちょうど休憩時間に当たっていました。突然の揺れに最初は、こんなもので収まるだろうと高を括っていましたが揺れは大きくなるばかりでした。「建物は、大丈夫か。火の始末は。生徒たちは。逃げ道は。」

そんなことを考えながら玄関の外へ避難しました。直後に、体育館で火災警報が発報し現場へ急行。体育教官室で警報機を確認するとステージ西側のランプが点灯。アリーナに入ると反対側のステージがよく見えないほど煙っていました。火事？煙か？と思ったのですが、それは、地震で体育館が揺られて天井やステージ上部のブドウ棚にたまったゴミや埃が落ちてきて舞っているのだと気づきました。火事でないことを確認し玄関に戻ると生徒、職員、講師等来校者は全員前庭に避難が完了し、安否確認をしているところでした。後に、先生に聞くと生徒の避難は、全員が教室での講話であったので容易に安否確認と避難誘導がとれたようです。本来ならば、災害時にはグラウンドへ避難するところですが、グラウンドへの通路は、体育館や本館、特別棟の脇を通行しなくてはならず、余震で落下物等の危険もあることから校長判断により前庭避難に変更しました。他高校のことですが、震災により体育館の天井ボードや鉄骨まで落下した高校がありました。その時間は、体育の授業を行っており、揺れによって生徒たちはアリーナの中央に集まって身を寄せて動けなくなりましたが、担当の先生が天井落下の危険を感じて生徒全員をアリーナ外に避難させ、その直後に天井が落下したとのことでした。非常時には、マニュアルどおりではなく臨機応変の対応が求められると感じました。

その後、私は施設の被害状況を確認するために校内を巡回しました。受水槽の出口ジョイント部が破断し水が流れ出していました。非常時には飲料水タンクとして考えていたことができなくなりました。また、重層の渡り廊下のつなぎ目のカバーが吹っ飛んでいました。それから、体育館は、窓ガラスが割れ、スピーカーが落下、天井も一部はがれ危険な状態でした。本館や特別教室は大きく柱が破損しているところはありませんでしたが、そのときは、余震等があり容易に入館させられないと感じました。

4時を過ぎた頃から、日が陰り寒くなってきたので、生徒は、学校長の判断で、「自力帰宅できる生徒と保護者が迎えに来た生徒は帰宅させる」こととしました。その他の生徒は、帰宅困難者とし、避難所を開設することとしました。本館や特別棟、体育館は安全を確認できないこともあり、一階平屋建ての、構造がシンプルで、屋外への避難も容易な、畳やマットの設備もある格技場を避難所とすることとしました。それと同時に、学校の発電機、照明器具、暖房器具、衛生用品等を運

び入れました。トイレは、屋外トイレを利用しプール水を洗浄水として利用しました。その後、東海村の災害対策本部と連絡を取り、大型の発電機1台、毛布120枚、食料120食、飲料水等の提供を受け、本当に助かりました。午後7時時点では、帰宅困難生徒は120人。職員は、校門に警備係を配置して迎えの保護者を誘導しました。最終的に翌朝まで学校に残ったのは、生徒、教職員、近隣住民、保護者の総勢68人でした。朝食は、職員が炊き出しをしてくれたのでそれでおにぎりを作りました。その日の午後には、全生徒を帰宅させ避難所を閉じることができました。避難所として不足していたと感じたものは、食料です。学校としても何らかの方法で備蓄できればよいのですが、なかなか容易ではなく、これは、村に備蓄をお願いしたいです。

最後に、この紙面を通して、被災した方々へのお見舞いと、村の迅速な対応や避難所運営に協力していただいたすべての方に感謝の言葉を贈りたいと思います。ありがとうございました。



東海村総合福祉センター「絆」

提供：澤井 正雄



東海村総合福祉センター「絆」

提供：澤井 正雄

築かれた東海住民の絆

泉 幸男

3月11日の夕方、「何かできることはないか?」と、軽い気持ちで舟石川コミセンへ出向くと、多くの避難者で混雑していた。指揮を執っているのは誰か?受付数は約800人、調理室では非常食の準備が始まっていた。まず、人数を把握する必要性を直感し、各部屋、ロビーや廊下に横になっている、または座っている560人を数えた。非常食は、お湯の確保が難しく、さらに約30分待たなければならぬ。しばらく待つてほしい旨を伝えながら、20cm袋入りのビスケットを3人で食べるよう配布した。本当に静かに時間だけが経過していた。

非常食の配布は午後10時前から始まり、全員に行き渡ったのは12日の午前1時を過ぎていた。この活動に「何か手伝うことはありませんか」と訪ねてきた若い方々、高校生もいた。屋外の車内にいる人達へも配食し、その数は560に110を加え670食に達した。

明日の朝食は?炊き出しの話になり、午前5時集合となった。「俺がカマドと釜を持ってくる」。

12日午前2時過ぎ帰途につき、何事もなかったように、静寂の中、満天の星だけが輝いていた。

炊き出し用カマドと釜は3セット揃った。各3~4回の炊き出しをしたが、最初は火加減が分からず、一様な『ごはん』が炊けず戻されたが、おばさんがコツを教えてくれた。それに、持ち寄られた材木は、丸太。まき割りのコツを教えてもらう若人達に笑顔があった。

飲料水確保のため、給水待ちの長い行列。コミセン前の田からポンプアップして地下水を汲み上げ、豊富な給水が可能になった。誰が考えたのだろう!その水量は多く、行列は途切れることはなかった。燃料、米不足は時間との勝負となった。誰の指示もなく率先して出かけ、米を60kg、90kgと調達してきてくれた人がいた。対応した人々の“人間性”を知った。

13日午後になって、今後の対応について、地区内の役員及びこれまで積極的に活動された方々を含めて話し合いがもたれた。いつまで継続するのか、避難者の実情調査の必要性、これまでの物品調達の経費の措置、役場職員との連携等……、これまでの住民活動は14日に停止することを決定、その後は、行政に引き継がれた。

全壊、半壊した家はないのに、なぜ、これほど多くの住民がいたのか?停電、断水の中、不安な生活をした方は多い。独居老人に配食して感謝される一方、何か割り切れないものを感じた。その時、塀越しに井戸水をもらい運ぶ、隣のアパートの若い方がいた。老人は、「倒れた大谷石の片づけをしてくれた」と教えてくれた。年齢層を超えた村民同士の絆が生まれていた。

最後に、この活動に参加された住民の多くは、大なり小なりの被災をされていたはずであるが、ここに馳せ参じて活動したことに敬服する。本当にご苦労様でした。



舟石川コミセン

提供：本人

震災を通じて考えたこと

市毛 八郎

3月11日の東日本大震災では、停電や断水により避難する人々の波、また、放射性物質飛散による原子力災害、農作物の風評被害と、被害の大きさが身にしみた。人間が生きていくためには助け合う地域と相互扶助が必要と感じた。

人間が生活するために必要な水は災害時に各公園又はコミセンに災害用・防災用の浄水場（飲料水）を作ること、放射線等の原発事故に関連するものは住民に正確な情報を伝える事が、JCO臨界事故を経験した者として、一番重要と思った。

津波・台風に加え、高台である石神城跡地に避難用施設を作る等の安全強化は村の課題と思う。

また、「はい」という素直な心、「すみません」という反省の心、「おかげさま」という謙虚な心、「わたしがします」という奉仕の心、「ありがとう」という感謝の心といった、ボランティア精神と日常の心構えが大切であると避難先で感じた。



平成23年3月11日東日本大震災福島第一原発事故による放射性物質により農作物（ホウレンソウ）の風評被害ありJAにじのなか直売所指導のもと畑より処分中の風景
＝平成23年4月28日 午前10時 東海村石神外宿木下畑 提供：本人

結束と連携と

東海村 福祉部介護福祉課 稲田 健一郎

夜空に瞬く星がとても美しいと感じた数日間が、未曾有の災害がもたらした結果のひとつであり、私たちの生活を一変させる序章でしかなかったとは、なんとも皮肉な話です。

最初の揺れを感じたとき役場の1階で執務にあたっていた私たちは、揺れの収まりとともに庁舎内の一般来庁者に建物外への避難を促し、自らも人や建物の被災の状況を確認しつつ、所属長の指示により住民対応班としての業務に取りかかりました。すなわち、直後に立ち上げられた災害対策本部からの情報と指示をもとに、村内各所で避難所を立ち上げ、避難してくる村民の皆様への適切な対応と情報提供を行うこと。

私たち介護福祉課の職員は、日頃から高齢者や要介護の方、障がいを持つ方たちと接する機会が多くあるため、避難所の設置とあわせて、そういった災害弱者の方たちへの対応も同時に求められています。そこで、介護認定を受けているひとり暮らしの高齢者や高齢者世帯を優先的に訪問し安否を確認するチームを設け、早速徒歩や自転車で該当世帯に向かいました。結果として、倒れてきた家具に足を挟まれて動けなくなっている独居高齢者を救出する一幕もありました。

災害対策本部は、避難所として6つのコミセンのほか、役場や小学校、総合福祉センター「絆」などを順次指定し、住民対応班を中心に職員を派遣しました。震災当日から5日間つめることになった真崎コミセンでは、私が到着した午後4時の段階ですでに自治会長や一般住民の方たちが十数名集まっていました。早速把握している情報や、村の今後の方針などを伝え、あわせて避難所の運営にあたっての協力を求めました。

真崎コミセンにおいて、深刻なアクシデントもなく災害の最初の大波を乗り越えたと評価してくださる方がいるとしたら、ひとえに地域の皆様やコミセンのスタッフ、役場OB・OGの支援や尽力があったからこそといえるでしょう。避難してくる地域の方はもちろん、仕事の都合などで来村したが移手段のない方や、原子力事業所関係で来日している方、家族が避難しているか確認を求め方など、入れ替わり立ち替わり多様な避難者が出入りする中では、限られた人数の村職員だけではとても対応しきれるものではありません。自らも被災しているにもかかわらず、食事作りや寝床の確保、避難者の誘導など、特に年配の方を中心に、臨機応変かつ意欲的に対応をしてくださった地域の皆様に深謝いたします。

週末に控えていたイベントのために下ごしらえが済んだ食材が豊富にあったという僥倖に恵まれたとはいえ、地域の皆様が「一致団結してこの危機を乗り越えていこう」という強い意志があったからこそ乗りきれたと今あらためて痛切に感じています。翌日の早朝から、避難所に駆けつけてくれた村議とともに近所の商店で食料を買い集め、避難している数百人の方の食事を手配し、貴重な飲料水がいつ届くのかにやきもきし、近所の方の御好意で井戸の利用に御快諾をいただきながらもトラブルがあれば利用方法を話し合い、様々な問い合わせに対応しつつ、新たな情報が入れば逐一ホワイトボードに掲示して…そのような緊張状態が続く中で、深夜の敷地内巡回をしていると、静謐な空気とともに夜空に満天の星空が。少しの気のゆるみが、村外の自宅にいる妻と3人の子ども

たちの無事確かめたいと思ひ起こさせ、多くの村職員と同様、家族の安否すら確認できない我が身のふがいなさを思い。

その後、南台団地の法面が崩落し多大な損害が出たために、自宅を建て直すこともままならない方がいるという情報をもとに、日本原子力研究開発機構の協力により、長堀住宅の一部を村が借り上げ、入居の手配をすることになりました。震災後半年を経過しても不便な生活を強いられている方を含めて、今回の震災で被災された皆様にお見舞い申し上げるとともに、真崎コミセンはもとより、避難所内外で御協力いただいた地域の皆様や企業・団体の皆様に、あらためて厚くお礼申し上げます。



村松コミセン

提供：田所 洋一

震災を通じて考えたこと

伊藤 伊三郎

3月11日の午後、東海村役場へ届けを出しに行っていました。事務手続きをされていてしばらくしてユラユラと地震を感じ、「ウーン、地震だ」とつぶやいていると、女子職員さん達も地震かなと口々に言っているのが聞こえてきました。私の脳裏には先の日ニュージーランドで発生して日本人も犠牲になりました大地震のこと、そして東北の方で地震があって、少々の津波でしたが朝の7時のニュースで時間を延長して、繰り返し繰り返し放送していたことがうかびました。ひょっとしたら大きな地震になるのかなと、足早に外へ出て中庭の先の方まで歩いていると東の方からゴーという音と敷石がガタガタガタガタという音と共にバタバタというすさまじい振動で、もう立って歩く状態ではありませんでした。つつじの植えてある花壇のところではいつくばってしまうほどでした。私の同級生も後から来て、こんなに大きな地震は初めての経験だなと話していました。議会棟から本庁舎へ通じる通路が大きく揺れているのを見ているうちに庇の金具が折れたのか、落下するのを目の当たりにしました。その場所に止めていた軽乗用車の後部に当たって窓ガラスなどが壊れてしまいました。数分揺れた地震がおさまってから、改めて、自然災害の恐さを実感致しました。帰路に向かう際に周りを見回すと屋根瓦が崩れていたり、大谷石の塀が倒れて散乱して道路をふさいでいたので、道路脇に片付けて車を通すありさまでした。我が家はどうなっているのか。外から見る分には屋根瓦、窓周りや外壁は良いとしても家の中へ入るのが恐いくらいでした。想定していた通り食器棚が倒れて、もう一つの棚は観音開きが開いていて瀬戸物、食器皿などが散乱して割れていました。日が暮れて、停電のためローソクを灯し、三月とはいえ小寒いので古い石油ストーブが役立ちました。飲料水は、駅西で「井戸水をあげます」と貼り紙がしてあり、水をいただけたのが何よりもうれしかったです。世の中電化電化で便利になればなるほど、災害の時停電になればお手上げです。私達は子供の頃、関東大震災の東京の様子を学校の先生がよく話して下さいました。お昼時で昼食の準備に火を使っていた時間帯でしたので大火事になったこと、道路が割れたりなど、恐いくらいのお話でした。震災は忘れた頃にやってくるとは正にこのことで、大地震が発生し自然災害の恐ろしさを実感致しました。言うは易く行うは難しではありますが、今後は防災を優先して災害に強い街づくりを目指して、いろいろな災害が起こりうる事を考えて、避難できる仮設住宅など直ちにできるような土地の確保、防災のために各班（常会）などで年に何回か防災の話し合いをしたり、何か備品でも揃えておけば良いのかなと思っています。復旧復興を半歩ずつでも前に行くように願います。大震災で亡くなった方、けがをした方、家屋その他の物を失った方々にお悔やみ申し上げます。がんばっぺ東海村、頑張ろう茨城、日本がんばろうをスローガンに気持ちを合せ、被災地の復興を支援したいと思います。

震災で深まる国際交流の絆

独立行政法人日本原子力研究開発機構

国際部国際交流課 海老澤 宏文

原子力機構には、近年、研修や共同研究などを目的として各国から研究者が来所しており、震災時も多く外国人研究者が被災しました。幸いにも日本人も含め機構に来所されていた方にけがなどはありませんでしたが、来所者の宿舎でもあった阿漕ヶ浦クラブの一部が倒壊したほか、他の宿舎も停電、断水により数日の間不自由な生活を強いられました。

宿舎の中でも多くの外国人が滞在していたのが、村松虚空蔵尊の近くにある真砂国際寮でした。当時寮には、J-PARC（大強度陽子加速器）などの施設を利用するために欧米の大学や研究機関から若手の研究者及び研修で来日していたタイやインドの研究者、宿泊不可となった阿漕ヶ浦クラブから避難してきた方など日本人を含め20人余りの滞在者がいました。未曾有の大災害であり停電及び断水状態の解消には時間がかかり、研究環境の回復には相当の期間を要すると予想されたことから、本人の希望又は研究者の所属部署の要請に応じ直ちに母国や東京などへ帰国や避難ができるよう対応をしていましたが、交通網もほとんどマヒしていたため寮から出られず、交通網が回復するまでの数日、私はこの真砂国際寮を訪れ、炊き出しなどの生活支援にあたりました。寮は大きな被害はありませんでしたが、停電によりテレビやパソコンも使えず、飲み水も建物の屋上の貯水タンクにかろうじて残っていた水を節約して使う状況でした。また、地震の存在すら感じることもなかった外国人研究者にとって、度重なる余震の続く毎日はとても不安な日々だったと思います。

私は外国人の精神面等の心配をしていましたが、そのような状況下にも関わらず、目にしたのは意外な光景でした。普段は実験などのスケジュールの違いからお互いにそれほど顔も合わさず、文化の違いからそれぞれマイペースな生活スタイルですが、滞在者はお互いに自分たちの東海村からいただいた配給食糧や残された少ない食糧を持ち寄り共同で利用したり、水を求めに井戸や川へ行ったりと国籍や文化の壁を越えて協力し合っていました。おかげで無事に震災直後の数日をなんとか乗り切る事が出来ました。私自身、原子力機構の外国人受入れ担当として、また1人の日本人として、外国人の彼らとともにあの非日常の時間を共有し、その中で様々な事を語り合えたことはとても貴重な経験となりました。

現在、原子力機構では、「国際的中核拠点」を目指すべく様々な取り組み（国際拠点化）を進めています。今後、J-PARCなど実験施設が本格復旧すれば、また多くの外国人研究者が東海村に来ることになります。私は今回得た経験を是非活かし、東海村をはじめ様々な関係機関との連携強化を進め、国際化していく東海村で外国人の方々が安心して生活していただけるよう取り組んでいきたいと思っています。



新川にてトイレ用の水を汲む様子

提供：本人

東日本大震災を振り返ってーいま思うこと

東海村 企画政策部政策推進課 大内 秀樹

平成23年3月11日（金）午後2時46分に起こった東日本大震災は、まさに未曾有の大震災だった。「未曾有」とは、辞書で引くと「今まで一度もなかったこと。きわめて珍しいこと。みぞう。（三省堂・大辞林）」という意味になるようだが、当時の状況を思い起こすと、今もなお、その言葉通りの記憶が蘇ってくる。

震災の発端となったマグニチュード9.0の大地震（震度6弱）の時、私は政策推進課の自席にいた。初期微動はそれ程でもなかったが、いつもなら止むはずの揺れがいつまで経っても止まず、大震災の到来を予感させた。数分間にわたる揺れは、いつしか本震へと変わり、気付いた時には、私は机の引き出しを必死につかみながら、大量に積み重なった文書ファイルの雪崩から身を守ることで精一杯だった。私はかつて「死」や「地球滅亡」ということを考えたことはなかったが、さすがに当時は「これで世界もおしまい」と腹をくくったものである。

本震の後、役場庁内にいた職員その他の人たちは、それぞれ大急ぎで階段を駆け下り、屋外の広場へと命からがら脱出した。とは言っても、脱出先は、いわゆる安全地帯には程遠い危険な場所で、長引く余震により5階建ての役場庁舎が崩壊して我々に襲い掛かってくるかと思う程だった。あのとき感じた言いようもない不安は、いま振り返っても尋常ではなかった。「これから一体どうなってしまうのか」、「これからどう動けば良いのか」まったく見当が付かないながらも、村職員として災害対策に従事するための本部テントの設営が始まった。テントを組み立てながら、職員同士でお互いの家族の安否を気遣ったり、長期化が予想される災害対策業務の今後を心配したりした。

当日夕方から、本格的な災害対策業務がスタートした。役場庁舎などへの一時避難者へ配布する毛布をかき集めたり、スーツ姿のままコミセンに仮設トイレを掘りに行ったり、また、震災当日から約2週間は、水道の不通により給水活動に取り組むなど、震災時ならではの体験が目白押しだった。もちろん、もう二度と体験したくないものばかりであるが。

私の記憶の中で一番鮮明に残っているのは、震災翌日の朝、役場庁舎1階において、一時避難者に支援物資のパンを配布したことである。個別包装のパンがあるうちは良かったが、次第に在庫が底をつき、最終的には、食パンを家族人数分の枚数だけ配布することとなり、罵声を浴びながら後輩とこなしたことを覚えている。震災によるストレスが村民感情を非常に不安定な状態にした。そのことを、まざまざと体感させられた出来事だった。このままの状況が続けば、いつかこの地で暴動や略奪が起きるのではないかと心配になった程である。「この子のために食パンをもう一枚もらえないか」という幼児を抱えた母親の切実な訴えでさえ、あの状況下では断固として聞き入れることはできなかった。私自身、心を鬼にせざるを得なかったあの瞬間を一生忘れることはないだろう。

震災の記憶は、なにも悪いことばかりではない。地域のみなさんの優しさ・温かさに触れ合える瞬間もあった。初日の村松コミセンでの仮設トイレ掘り、2日目から数日間滞在した真崎コミセンでのお手伝いや各地域への給水活動などを通して、村民同士、また村民と職員とがお互いに思いや

る「心のコミュニケーション」を実感できたのである。ライフラインの復旧など人命に関わる側面も大きかったせいなのだろうが、そこにはまさに理想とする「協働」の姿があったように思う。

今なお、東日本大震災からの復興までには至らない状況下にあるが、震災により育まれた地域の一体感や他人を思いやる心をぜひ村民の叡智として加え、実りある東海村の将来づくりに活かしていければと思う。

また、もう一つの震災と言ってもいいであろう「福島第一原発事故」の教訓を踏まえ、原発問題としっかりと向き合い、ここ東海村と原子力、そして子どもたちの未来を真剣に考えていく必要があると私は考える。



被災した役場正面玄関前：3月11日（金）午後5時42分撮影

提供：本人

村立東海病院の震災状況を振り返って

公益社団法人地域医療振興協会 村立東海病院
事務部 医事情報課長 小坂部 成生

1. はじめに

今回の東日本大震災で、犠牲になられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。また、被災されました方々にも心よりお見舞い申し上げます。

平成23年3月11日午後2時46分頃三陸沖を震源地としたマグニチュード9.0の大地震は、東日本太平洋沿岸に地震と津波による被害をもたらした。津波による被害は、想像を絶する規模で死者・行方不明者数は2万人となった。

また、巨大地震及び津波が原因で、福島県では、日本及び世界における最大規模の福島第一原子力発電所事故が発生し、大量の放射性物質が外部に漏れ出た。この影響で、放射能という目に見えない恐怖を国内外に与えている。

2. 地震発生から

東海村では、震度6弱の強い揺れであった。

当時、私は事務所内で業務をしており、建物の大きな横揺れを感じた。その時、管理者からの病院内放送で指示があり、病院職員は、入院及び外来患者さんの安全確保に努めた。

一度揺れが静かになったが、数十分後、今度は、茨城県沖を震源地とした震度6の地震が発生した。この時、私は駐車場におり、患者さんとしゃがみ込みながら、建物の大きな揺れを見た。この短時間に2度もとてつもない激しい大きな揺れを体験した。この時、正直言って建物が崩壊してしまうのではないかという思いが頭をよぎった。

建物内の被害状況は、全館停電、断水、エレベータ故障、自家発電を稼働させる重油の不足、医療機器の破損、通信機器の通信網遮断、給湯器や食器洗浄機の使用不可など病院機能停止寸前の状態であった。

入院病棟は、誘導等により患者さんの危険を回避できたが、入浴や食事提供などに大きく影響した。

外来では、震災直後から非常灯と懐中電灯を頼りに、24時間救急診療体制をとり、救急車や救急患者の受入を継続した。重症患者を入院病棟へ搬送する際は、担架を使用した。

そのような状況で、医師は全員当直体制とし、万が一の状況に備え救急患者の受入体制を確立した。また、他職員も院内に宿泊しながら、勤務に当たった。

職員の家族の安否確認ができたのは震災当日の夜間になってからであった。

翌日以降は、毎朝各部署担当者が集合し、各部署の状況を共有し、日々運用を決定した動きとなった。その後、震災から5日目（3月16日）、未だ外来診療が出来る状態ではなかったが、職員一丸となり、外来診療を再開することができた。

その後、少しずつ院内設備は復旧したが、全面復旧したのは6月中旬であった。

3. 振り返って

緊急情報入手の手段や情報の共有、飲食物の確保や、通勤手段の確立(ガソリンの手配を含む)、電源確保等ライフラインの整備が大切だということを痛感させられた。

当院の診療機能が3ヶ月余りで復旧でき、地域住民のために患者さんの受入体制を保てたのも、震災直後からの村役場を始めとする公的機関や各業者からの協力支援や、住民の方からの励ましがあったからこそと考える。大変有難く、この場を借りて御礼申し上げたい。

職業柄当然かもしれないが、職員は被災者でもありながら、さらに恐怖や不安な気持ちを抱きながらも全力で業務を全うできたと思う。

また、今後二度と震災が起こらないことを祈念しながら、今回の震災を踏まえ、自分自身にできる備えをしていくとともに、病院の震災マニュアルの見直しに力を注いでいきたい。



舟石川コミセン

提供：泉 幸男

東日本大震災の避難所となって

東海村立白方小学校 教頭 大久保 賢一

3月11日、金曜日、地震直後の児童への対応に目途がつき始めた頃、迎いの保護者に混じって地域の方々が集まってきた。豊岡、亀下方面に避難指示が出され、白方小学校が指定避難所になったという。至急、体育館を開放した。間もなく村役場職員も到着し、近隣住民が避難してくるのを誘導し始めた。落ち着く場所がはっきりしたためか、体育館に入った方々はホッとしているようだった。

地震直後から停電になっていた。日が暮れ暗くなったため、照明を確保しようと役場職員が投光機を設置していたが、発電機用エンジンの排煙のため体育館に持ち込めないことが分かった。そのため、工夫して玄関外に設置し、外から全体を照らすようにしていた。体育館に入らず、駐車場で車内に避難していた人々も多い。真っ暗に停電した中で体育館の玄関全体を明るくしたので、辺りがホッとした安心感に包まれた。

白方小体育館には緊急時用物資が備蓄してある。避難してこられた方々に毛布や食事が提供された。後にニュースで、避難してきても着の身着のまままで一夜を過ごしたという方が多かったと聞いた。寒いときの災害に備え、避難場所に毛布を準備してあるのは素晴らしいことだとその有り難さを実感した。

時間が過ぎるとともに、避難されてくる地域の方々が増えてきた。中には、地震のため安心して体育館にいられず、駐車場の車の中で一夜を過ごす方も多かったようだ。差し当たって、トイレトペーパーを確認する。寒さのためストーブを用意したかったが、学校のは大型の体育館用で、電気がなければ使用できない。とりあえず、石油はすぐ使えるよう準備しておく。水道はまだ出ているので有り難いが、水洗トイレは電気によって作動し、浄化槽も同様なので使えなかった。

夜も更けていったが、目が冴えてなかなか休むことのできない方々が多かったようである。そんな中で、必要な物資の在庫確認と補給連絡に、そして避難されてきた方々の健康ケアにと、3人の役場職員の方が夜通し対応に当たっていたのが印象に残った。翌朝、聞いてみるとほとんど睡眠をとらず、160人以上の避難されてきた方々に対応していたようである。

翌日になると、多くの方々が自宅や親戚の家に戻られた。それでも夕方には、60人以上の方々が白方小学校で二日目の夜を過ごす準備をされていた。また、二日目午後には延長コードが設置され、外部電源により体育館でストーブが使えるようになった。石油の手配にも、役場の方々が奮闘していた。

三日目になると、残っていた地域の方々も少なくなる。午後4時、白方小学校は避難場所指定が解除され、残っていた方々も白方コミュニティセンターに移られた。今回、避難された皆さんの生活を見ると、毛布や食事の提供のほかにプライベートな空間の提供が必要だと感じた。

震災で感じたこと

神永 大樹

3月11日に地震が起きた時私は学校にいました。校舎の外に避難した後、先生方から交通機関がまひしたことを聞き地震の大きさに驚かされました。電車と自転車で登下校していたので家まで自転車で帰ることができました。帰る途中で倒壊している建物や割れた路面を目にし、自宅の状況が気になりました。家に帰ってみるとガス以外のライフラインが止まっていたのですが、家族みな怪我もなく帰って来られたことに安堵しました。余震が続く中、蠟燭の明かりで一晩明かしたことを今でも鮮明に覚えています。

その翌日の朝、私は村内放送を聞き役場に水を取りに行きました。給水をしている役場の職員の方々を目にし、その姿に心をうたれました。ご自宅の様子が気になる中、皆のために一生懸命対応されていました。

地震の二日後、私の家は家族で協力したこともあり、ある程度落ち着きを取り戻しました。午後から私は役場でたくさんのお話を聞きました。家の片づけもままならず避難所や車で一晩過ごした方、家にいるのが怖くて避難所に避難した方などいろいろな人がいることを知り、そういった困っている方々の力になればと思い、給水の手伝いをしました。

手伝いをしている中で、近所の方と手を取り合っているというお話をよく聞きました。日頃の人との付き合いの大切さや人の心の温かさを実感することができた気がします。また手伝いをしていながら人と接する機会が多くあり、他にたくさんのことを学べた気がします。その中の一つに人と人との協力の大切さがあります。震災の時に給水に来ていた人の中には一人暮らしのお年寄りも多く、重い水を運ぶのに苦労していました。そんな時、給水に来ていた男の方が、近所に住んでいるからと言って水を運んでいきました。協力というよりも思いやりに近いと思いますが、そうした一つ一つの積み重ねが大切だと思いました。給水の手伝いをしている中で役場の職員の方々とお話することもできました。話を聞いていると日が経つにつれて震災の被害が大きかったことがわかってきました。瓦が落ちただけではなく浄水場が壊れたり、電柱が倒れかけたり、道路が陥没、上下水道が破損したりなど、たくさんのが壊れたそうです。実際に見たのはほんの一部だということを実感できました。今までTVの中の出来事だと思っていたことが、実際に起き、体験すると何もかもが他人事ではなく自分に関係するのだと理解できました。

震災で給水の手伝いをして感じたことは、手伝いやボランティアといった活動は人のためだけではなく自分のためにもなるということでした。そういった活動をすることにより、多くの情報を集めることができ、なおかつ人のためにもなる、そしてめぐりめぐっていつかは自分にかえってくるのではないかと思います。

『東日本大震災を振り返って』

東海村建設業協同組合 理事長 河野 武

3月11日地震直後は、「また地震か？たいしたことはないな」と思って仕事をしていると、棚のものが落ち始め、天井が落ち、立ってられない状態になり、慌てて外に出ました。外では、止まっている車が今にも走り出しそうに動き、外壁には亀裂が入り、立ってられずに伏せている状態でした。

時間にして10分くらいして落ち着きだしたので、電車通勤者には同じ方向に帰る車通勤者に送ってもらうように手配し、残った社員で会社として何をしたらいいのか相談し、まだ携帯電話が通じていたので各現場にいる従業員の安否の確認・現場状況の確認・交通状況の報告を受けて、通行できない道路の封鎖を行うように、近くにいた従業員に指示しました。

そして、役場の災害対策本部に行き、情報を収集し、何が必要なのか、早期行動は何をすればいいのかを役場担当者と打ち合わせをして、建設業として早期に動くのには、どうするのがベストなのか、検討しました。そのうち携帯電話は通じなくなりましたので各建設業の会社を回り、まず近くの道路・ライフラインの点検をお願いし、通行できない場所は独自の判断で通行止めにしてもらい、発電機・テント・トラックを役場災害対策本部に持ってきてもらい、各建設会社の責任者には対策本部に詰めてもらい、役場の担当者からの指示で動くようにしてから、当社が動くのに何を早急に用意したらいいか、従業員と相談しました。結論は、まず電気の確保（発電機）。その燃料も必要なのでガソリンタンクを用意しているときに、従業員の家族の安否はどうなっているか連絡も取れない状態なのにと、早急に一度家に戻って安否を確認してから戻るように指示しました。

震災が発生した時間帯や金曜日であったことで、いろいろな面で材料の手配、備品の調達が可能なこともあり大いに助かりました。東海村に本社を持つ建設会社の方々には震災直後から明け方まで各避難場所の照明の手配や仮設トイレの穴掘りを役場職員と一緒にしてもらいました。

このような緊急時には村内の建設業がやはり一番頼りになり、地域住民と密接な関係にあり、自分たちも少なからず災害にあっているのにもかかわらず協力をしてもらえたことは本当に心強いと思いました。

翌日より、ライフラインの確保に多くの村内建設業の協力のもと、道路整備・落下物の撤去・ブロック塀の撤去・飲み水の運搬車両の提供といち早く動くことによって住民の皆さんからも称賛を得ることもあり、東海村の建設業の存在感を示すことが出来ました。

私どもで一番困ったことは燃料の確保が大変であったことです。工事車両・作業員の通勤車両・建設機械の燃料を確保するのに3日くらいは大変でした。それ以降は役場の方で手配してもらいどうにか動くことが出来ましたが、もう少し災害支援車両に優先的に燃料を入れてもらうことが出来るように今後検討してもらいたいと思います。

各会社では、従業員の食事を確保するのに炊き出しをしたり、もらい物の缶詰を持ち寄ったりして作業員に配っていました。電気が生活のなかでどれだけ必要であるかを実感させられました。

東海中との絆

東海村立東海南中学校 生徒会長 菊池 省吾

3月11日に起きた大震災から、早いものでもう8か月が経ちました。あの記録的な大震災によって、僕たちは当たり前だと思っていた普段の生活を失ってしまいました。東海村も大きな被害を受け、東海中は校舎の一部が使えなくなってしまいました。その結果、僕たちは、東海中の新入生と共に新学期のスタートを切ることになりました。

自分の入学時を振り返ってみると、期待と不安を胸に中学校の門をくぐったことを思い出します。ただでさえ、中学校でうまくやっていけるかという不安があるのに、余震などの恐怖、さらには違う校舎での生活とたくさんの戸惑いがあったと思います。

東海中の1年生が、南中の1階で生活すると決まってから、僕たちなりに、どうしたら東海中の1年生が安心して中学校生活を送ることができるのかを話し合いました。まず、南中の新入生と同じように東海中の1年生を温かく迎えようと歓迎式を行いました。わずかな準備期間だったので、歓迎のあいさつや全校合唱ぐらいしかできませんでしたが、実際に顔を合わせることで、これから一緒に生活していこうという思いを共有できたと思います。

また、生徒会で購入したボールを東海中の1年生にも使ってもらいました。昼休みに、多くの東海中の1年生が、グラウンドに出てボールで遊んでいるのを見て、ほっとしたのを思い出します。

正直、とまどいがなかったわけではありません。今まで使っていた教室が使えなくなったり、登下校の時混雑したりと環境の変化がありました。しかし、立場を変えて考えてみると、東海中の1年生の方が、何倍も不自由さや不安を抱えていたはずです。部活動の体験入部はあちこちへ移動しなければなりませんでした。そう思うと、自分の不便さはちっぽけなものだと感じるようになりました。

地震が起きる1か月前、東海中と東海南中で協力して合同の立志式を行いました。同じ東海村の中学生として、知恵を出し合って、助け合って立志式を成功させることができました。二校で合唱した「この地球のどこかで」が、印象に残っています。このような下地があったからこそ、他校の皆さんと協力することができたのだと思います。

今年の南中の生徒会は、「つながる」をテーマに活動してきました。あいさつ運動を行い地域の方たちとつながったり、震災の復興支援として何ができるか話し合ったりしました。実際に委員会を中心に活動もしました。人は一人では生きていくことができません。多くの人々とつながることで、人間らしい生活を送ることができます。東海中生と共に生活したことは、このことを実感できる貴重な体験でした。今後も、東海中と東海南中が協力し合って、お互いに高め合えるようになっていきたいと考えています。

東海高校の一日

茨城県立東海高等学校 校長 桐原 幸一

まず最初に、東海高校が東日本大震災を一人の怪我人も出さずに無事切り抜けられたことは生徒一人一人、教職員一人一人の対応の素晴らしさと、それを支えてくださった地元東海村の地域の皆さまや行政のおかげであったと感謝に堪えません。

3月11日、東海高校は1、2年生の進路指導の講話を実施していました。丁度、そうした学校の行事が終了し、各クラスがまとめのホームルームをしているその時、地震の揺れが伝わってきました。はじめはゆっくりと、徐々に大きくなっていく、不思議な揺れでした。校長室にいた私は、これは尋常でないと感じ、すぐに廊下のドアを開け、次いで事務室に入り緊急放送を指示しました。時計は午後2時45分頃を指していました。

すぐに校内の全生徒と教員、来校中の講師等を玄関前のロータリーに避難させました。なるべく建物から離れた広場の中央に生徒を集合させ、安全を確保しました。この間も地面は揺れ続け、校舎も大きく揺れていました。何度か大きな揺れがきて、30～40分程も揺れていました。ようやく大きな揺れがおさまっても絶え間なく余震が続いていました。

いつの間にか停電になり、携帯電話もほとんどつながらず、時折メールがつながる程度でした。非常用電話対応となっている学校の電話だけがかろうじて通じていました。この頃（午後4時30分頃）になって、徐々に震災の状況が車のラジオやテレビ等で入り始め、ただならぬ大震災らしいということが分かってきました。

先生方と話し合い、窓ガラスが割れ、散乱している体育館を避け、比較的被害の少なかった格技場を一時的な避難所とすることにし、そのことを直接、隣接する消防本部に伝え、避難所としての対応を依頼しました。夕方には東海村から発電機、飲料水、毛布、非常食、灯油、投光器が届けられました。

東海高校の避難所には、津波の被害を受けた生徒の家族と近くの住民15人、隣接する青少年センターの職員や図書館の職員15人、東海高校の教職員17人が残ることになり、常磐線やバス等が不通になったことで帰れない生徒98人が格技場に移動し、夜を迎える準備を始めました。

すっかり暗くなり冷え込んで来る頃には、教職員や生徒、村の職員が自然に声を掛け合って動き、ストーブの準備、毛布、非常食の配布等、避難所としての対応もできました。後になって考えると、東海高校が地域の高校として、東海村との連携を深め、青少年センター、図書館、消防署等と普段からボランティア活動等を通して顔見知りであったことや、PTAや後援会などに地域の方が多くかかわってくださっていたことも、震災へのスムーズな対応を可能にしてくれたと思います。

その後も震度3～4程度の余震が夜通し止むことなく続き、生徒を迎えに来る保護者もいて、眠れない生徒たちが多かったようです。こうした中で、毛布やストーブで寒さを防ぐことができたことに加え、全てインスタントではありましたが先生方が集めてきてくれた味噌汁、コーヒーなどの温かな飲み物が皆の心を落ち着かせ、好評でした。朝を迎える頃にはプールの水をバケツに汲み、トイレの準備を整えることができました。12日の朝刊は届きませんでした。

明け方、前夜からごく少しの非常食だけだった生徒たちに何か食事らしいものをと先生方と相談したところ、部活動の顧問の先生方から合宿所に白米があること、地元東海村の先生から自宅のカマドを使えることが提案され、朝の6時に7升の米が炊きあがり、届けられました。生徒たちが率先しておにぎりを作り、地元の方を含め避難所の皆で分け合いました。おにぎりを食べたことが気持ちを落ち着かせてくれたようです。

明るくなると震災の状況も少しずつ明らかになり、福島第一原子力発電所が揺れと津波によって被害を受けていることや、つくば市では原発事故を恐れて県外に避難する人が出ているといった話が伝わってきました。

このうわさを聞いてすぐに東海原発の情報を集めました。村の街頭放送は数ヶ所のスピーカーの音が交錯し、反響しあって良く聞き取れませんでした。脳裏に浮かんだのは、不確実な情報で生徒を動揺させないこと、「安全」とされている間に生徒を確実に保護者のもとに返し、できるだけ早く避難所を閉じ、教職員を帰宅させることでした。

12日(土) 正午の時点で、生徒46人、住人15人、教職員12人が避難所に残っていました。そこで、保護者と連絡を取り、生徒を安全に帰すことに全力をあげました。保護者と連絡の取れない5人の生徒は、連絡の取れない場合は学校に戻ることを前提に自宅近くまで送り、確認が取れてから帰宅させることにしました。

午後2時頃までには全生徒の保護者と連絡が取れ、午後2時30分頃、村に東海高校の避難所を閉じることを伝えました。午後3時30分頃までには避難所から全員が退避し、避難所を閉じることができました。

11日(金) 午後2時46分から12日(土) 午後3時30分頃まで、長い長い一日でした。

村や地域のサポートは言うまでもありませんが、本当に厳しい状況の中で事務部門が非常電話の対応に当たってくれたこと、先生方が自分の家庭より生徒の安全確保を優先してくれたこと等々、本当に感謝しても感謝しきれない思いです。



東海村総合福祉センター「絆」 提供：澤井 正雄

震災を体験して

切敷 明彦

翌日に約20年ぶりの大学の同窓会を控えていた自分は震災直後も「明日電車動くかな？」くらいの気持ちでした。確かに運転していたハンドルは大きく取られ、電柱が左右に振られ電線が波打つ光景は、初めて見るもので今までの地震とは違うのは感じていましたがまさかこんな大惨事になるうとは…。

ジョイフル本田に向かっている時に地震に遭ったのですが信号は点滅し電柱も倒れてくる勢いでしたので平原工業団地にとりあえず避難しました。遠くには工場内から避難してきた女子社員が倒れ伏している様子も見えました。揺れがとても長く長く感じました。最後に大地が震えるような音が聞こえたのを記憶しています。

段差の出来た道路をゆっくりと家に向かいました。家の外溝は一部の倒壊で済んでいましたが家の中はひどい状況でした。あらゆる棚が倒れ、天井の大きな照明カバーも落下し、姿見ももちろん倒れていましたが、その奥に震えて伏せている愛犬がいました。無事でしたが抱っこしても震えはずっと止まりませんでした。今でも地震がくると一目散にケージに駆け込んで行きます。

外に出ると近所の住人の方達が無事を確かめ合っていました。車イスのおばあちゃんもいらっしゃいました。余震が来るかもしれないとしばらく外にいました。小学校には保護者が迎えに行くような情報が入ったので行ってみると、水が至るところで噴き出している校庭に子供達が集まっていました。泣いている女の子もたくさんいました。

震災翌日は自分の誕生日でしたので懐中電灯の明かりの中でお祝いしてもらいましたが、一生忘れられない出来事だったと思います。

季節的なものか、電気はそれほど不自由に感じませんでしたが水は困りました。飲み水はもちろん、風呂やトイレでこんなに水を消費しているのかと…井戸水を分けていただいたり、息子と近くの小川に何往復も水を汲みに行ったりしました。

震災を通じて感じたことは、東海村の住人も役場の職員の方も本当に頑張っていたという事です。自分も消防団に属していますので、コミセンなどに行きますと寝ずに対応している職員の方々に会いました。

きっとこの震災で、お金では買えないものを見つけた人もたくさんいると思います。



震災直後の娘の部屋

提供：本人

乗り越える

東海村立東海中学校 教諭 西念 美佳

平成23年3月11日。あんな大きな地震が起こるとは、誰もが予想しませんでした。いつもの朝、いつもの授業、いつもの給食。一つ違うといえば、6時間目に避難訓練が行われることでした。

6時間目。午後2時35分。私は、担任として教室にいました。放送が入り、生徒とともに外に避難し、反省連絡が入った後、校舎に戻ろうとしたその時、午後2時46分あの地震が起こったのです。ゴーっと地鳴りがして、次の瞬間には立ってられないほどの揺れが襲いました。校舎は波をうち、体育館のガラスが外れ、グラウンドは地割れが起きそうなほど音を立てていました。たった数分間のことでしたが、私には1時間にも2時間にも感じられた時間でした。

しかし、一番の悲劇はそれからでした。

水の出ない苦しみ。ガスが使えずお風呂にも入れない。電気が通らない。電話が通じない…。どれほど便利な生活に身を置いてきたのかを痛感した数日間でした。映画のパニック状態が、目の前にあったのです。

現在、科学の大きな進歩により、私たちは便利な生活に身を置くことができます。でも、その生活に身を置いてきたために、エネルギーなくしては生きられないほどの、生活力の低下を改めて感じる機会になりました。人間と自然の共存は、自然災害との共存でもあり、科学でも自然に勝つことができないのです。

しかし、我々人間は、負けたわけではありません。電気がない夜、見たこともないほどの星の輝きに心を癒やし、動き始めたのです。水が出なければ水を分け合い、情報を交換しては助け合いました。

あの地震で東海中学校が失った一番の損害は、本校舎です。東海中学校の本校舎は、建てられて45年です。今、その歴史に幕を閉じようとしています。二度と皆で入ることができなくなりました。コンクリートの壁は落ちて外が見え、2階の渡り廊下は今にも崩れかけています。

でも、私は思います。もし本校舎で、あの地震の時に全員が授業を受けていたら、皆助かっていたのだろうか。私には、東海中学校の校舎が皆を守ってくれたように思えてなりません。

今、本校舎が守ってくれた笑顔達は、本校舎の前にあるプレハブ校舎で輝いています。1学期は各学年がバラバラの場所で生活しなければなりませんでした。地域の方や保護者の方々に支えられ、2学期から東海中学校に戻ってくることができました。

もう二度と、このような災害が起こらないよう切に願います。「助け合う愛」と「笑顔」でこの震災を乗り越えようとしている生徒達は、震災以前よりも頼もしく見えます。この復興を糧に、大きく成長してくれると、私は信じています。

東日本大震災を体験して

酒井 光恵

毎日、当たり前のように過ぎて行く日々。それが続く事を信じて疑わなかった日々。その思いをくつがえしてしまった大地震。

台所は、食器棚の扉が開いて、落ちて割れた茶碗、皿、グラス等で足の踏み場もない状態。居間に至っては、ピアノも動き、上に乗せてあった楽譜、CD等が床に散乱、こちらも足の踏み場がありませんでした。茫然として、何から手をつけていいものやら……。

しばらくは大きな余震もあり、不安で、自宅にいた家族は車の中で一晩過ごしたと聞きました。私は、仕事先で、夜遅くなり、帰路の状況もわからず、近くの避難所になっていた、舟石川コミセンで眠れぬ一夜を過ごしました（その時のボランティアの方々の働きには感心しました）。翌朝、家に帰って前記のあり様です。

家族との連絡もなかなかとれませんでした。夫、娘一家（娘夫婦、孫3人）、息子二人、東京にいる娘の無事も確認できた時は、ホッとしました。

婿はその日の夜から、夫は週明けから出勤、息子たちは自宅待機という事で、それぞれ、食料品、水、その他、さし当たって必要な物を調達しにかけ回ってくれました。

オール電化にして、ガス、ストーブもなく、大変な思いをしました。電気が通じたのは、16日（水）。婿の実家のストーブを借りて、何とか暖をとり、煮炊きをする事ができました。灯りも、懐中電灯、ろうそくを使い、孫達はキャンプ気分でしたが…。水道も復旧したのが18日（金）。それまでは、トイレには、たまたま張ってあった風呂の水を使い、飲み水はペットボトルの水を使い過ごしました。毎日、ポリタンク、空きペットボトルを持って、白方公園の水源に通いました。近所の方が、“どうぞ使って下さい”との札を出して井戸水を提供して下さったり、ご飯を炊いたからと、おにぎりを作って持って来て下さったりと、まわりの方々のやさしさに感激ひとしおでした。

電気、水道のない生活がこんなにも不自由だとは思いませんでした。蛇口をひねれば水が出る、スイッチを押せば灯りがつく、それが当たり前で、この震災がなければ、そのありがたさや、大切さを実感できなかつたかもしれません。節電、節水等、心がける環境になったのはいい事だと思います。

皆で助け合い、このような事がなくても、お互いに思いやり、一人一人がまわりに配慮した生活ができるといいですね。

おかげ様で、我家は誰一人ケガもなく、また家屋敷にも大きな被害はありませんでした。それは本当にうれしい事でした。でも、まわりを見れば、まだまだ全面復旧には程遠い状況です。

行政は、被害にあわれた方々に対してのケアも含めて、気持ち、力、手をゆるめずに復興を進めてほしいと思います。

最後に、この震災でお亡くなりになられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

東日本大震災によせて

村松コミュニティセンター センター長 佐藤 昇

3月11日、この日私は仕事が休みで、勝田駅西方面へ、車で向っていました。

その途中、日立工機前で大地震に遭遇しました。時間は午後2時47分頃でした。車は木の葉のように左右に揺れ、電柱も大きく左右に傾き、電線はたれさがり、今にも倒れそうな状況で生きた心地がしませんでした。まわりを見渡すと、家の瓦は壊れ、塀は崩れ落ち、人々は外へ飛び出してきました。日立工機からは、女子社員がヘルメットをかぶり、旗を先頭に列をなし出てきました。さすが大企業だけあって防災訓練がゆき届いているな、と感心しました。

事態の重大さに気づき、コミセンが心配になり、急いで帰ることにしました。途中電話も通じず、交差点の信号はつかず渋滞し、道路はところどころ陥没していました。

コミセンへ到着してみると、被災者が集まってきていました。まずは施設の被害状況を調べました。館外は無事でしたが館内では、多目的ホールの壁が一部はがれ落ち、ロビーに設置してある本棚が倒れ、4000冊からの本が飛び散ってました。

本の整理は後回しにして、まずは被災者の対応にあたることにしました。

玄関前には、村松保育所の児童や先生が、60人程避難し座り込んでいました。

外では自治会の人や、消防団の方が集まり倉庫からテントや椅子を運び出し、設営してくれました。暗くなる頃には、地元の人やヘルメットをかぶった労働者、ボランティアにつきそわれて外国人の方が多数避難してきました。その間役場から多数応援が来られ、心強く感じました。また、役場と無線で連絡し、被災人数合わせて400人分の非常食、毛布等が運ばれてきました。まさに「備えあれば憂いなし」

私は、避難場所として最小限の用意はしておこうと、3年前から非常食と懐中電灯を買い備蓄しておきました。おかげで今回大いに助かり、被災者の皆さんからも喜ばれました。

食事については、事業所関係から社員や外国人の皆さんに弁当が届き、一般の被災者との差が出て、複雑な心境でした。

2日目には、某建設会社より発電機が届き、明るさや暖が戻り安心しました。

また、付近の会社、知人から差し入れが届き、地区自治会基金で食糧を買ったりして、炊き出しも順調に回転していきました。

子供達も明るさをとり戻し、図書整理に協力してくれたりして、大いに助かりました。

給水当番が一番大変でしたが、自治会長、ボランティアの方々が、1日4回の当番を決め、1週間整然と給水にあたりました。

今後何時あるか分からない震災に対し、早急に防災組織をつくらなければならない、会議を開き対応したいと考えています。

以上

震災後の引き渡し訓練

東海村立舟石川小学校 教頭 塩田 智代

東日本大震災の発生から1週間後の3月18日、元気な子どもたちの声が学校に戻ってきました。その間教師は、児童の安否の確認、学校内や通学路の被害状況の把握、安全確保に努めました。その後も今後の余震に備え、避難方法について話し合いを重ねました。

その結果、これまで使用していた「引き渡しカード」の改善を図ることになりました。

使用期間を6年間から単年度にし、引き渡した時に「いつ（月日、時刻）誰に」を担当が記入できる欄を設けるなどいくつかの改善をしました。

新年度になり、4月半ばの保護者会やその後の家庭訪問でお聞きした各家庭からの質問や意見、要望の1つが引き渡しに関するものでした。早速、5月の学校だよりで、学校の方針を保護者の皆様にお伝えをしました。

そして、課題となっていた緊急時の引き渡し訓練は、10月13日に実施しました。

約1ヶ月前に、保護者に対して、「訓練についての協力をお願い」の文書を配布しました。その中で、当日、緊急避難状況を伝えるメール及び電話連絡をする時刻や保護者に引き渡しをする時刻を伝えました。また、児童の待機場所である各教室において引き渡しを行うこと、混雑が予想されるためなるべく車での来校を避けていただきたいことも伝えました。さらに、今回は練習のため、都合がつかず、誰も迎えにこられない児童に関しては、児童を帰宅方面ごとに分け、教師が途中まで下校指導にあたることも伝えました。

その結果、1年生は全員を、学校全体では当日出席の児童615人中、500人を保護者に引き渡すことができました。また、50人が「学童クラブ」へ、65人が方面別の集団下校となりました。

複数の子どもがいる保護者は、複数の学級を回るようになったわけですが、大きな混乱もなく、「引き渡しカード」への記載をしながら約20分間で引き渡しが終了しました。

実施後の保護者アンケートによると、引き渡しの方法や手順はおおむね理解されており、特に問題はなかったようです。しかし、徒歩や自転車で迎えに来た56%の保護者が「スムーズであった」と答えているのに対し、車で迎えに来た44%の保護者が「駐車場の混雑が予想以上であった」と答えていました。

実際、緊急の引き渡しが必要な時は、保護者への連絡等もつかなくなり、一層の混雑が予想されます。どうしてもそれぞれの保護者が自分で判断し、行動しなければなりません。今回の訓練で、保護者と教職員が児童の引き渡しの基本的な流れを体験的に共通理解できたのは、大きな成果であったと考えます。こうした日頃の訓練の積み重ねが、一人一人の状況判断を支え、臨機応変に対応できる主体的な行動力につながるものと考えます。



舟石川小

提供：本人